1317906
塩出 麻美

存在の点滅　±0.5 次元で立ち上がる絵画　概要

序　主観と客観を抜け出す「存在の点滅」とは 他者＝リンゴをドローイングする

本論文は、コミュニケーション・認識における新しい形「存在の点滅」を、絵画表現によって提案するものである。多くの人にとって「他者」の存在を認識することは生きる上での根幹と成っている。人と他者との向かい合いは、無限の充実感を秘めており、しかし同時に不可分の暴力性は、時に様々な悲劇を生んでしまう。筆者は悲劇の原因について、「他者の全体像を把握したと思い込む誤解」があることを主張する。よく「立体的な理解」という言葉が肯定的に使われるが、そのような全体像、つまり人と他者という個人個人を超えて存在する「客観的な全体像」、これを構築せずに不可知の空洞部分を受け入れて数多のつながりを統合せずに束のまま受け止める。「立体的」に対して「多面的」であると言えるこのコミュニケーション・認識方法が、筆者が提案する「存在の点滅」というつながり方である。主観に覆われた絵画で他者を発見することは、一見不可能に思われる。しかし、平面という二次元から「±0.5 次元」を見出し、そこに立ち上がる絵画を表す時、新しい認識の形が表象されると志し、絵画の方法論として提案する。

１章　花田・鶴岡発言　モノとしてのリンゴ

花田清輝は『林檎に関する一考察』にて、リンゴに真に向き合う必要性を主張する。鶴岡政男は「事ではなく物を描く」にて、作家も肉体として暴かれる相互的な関係で物に向き合い必然的形態を獲得すべきと主張した。日本の 50 年代には、西洋美術史の主体と客体、日本美術史と西洋美術史、作者と国際情勢という３つの二面的な背景が存在した。両者は筆者と視点を同じくする。５０年代には「もの」が客観性を伴って、この問題の拠り所になっていたことが分かる。

２章　主体的まなざし　リンゴをキャンバスに入れる

原風景として、お米が立ち上がること、ものがある事、虚の透明性などへの興味を持っていた筆者は、絵具に塑性が強い油画に出会う。存在を平面に「入れる」ことを目標に、現実から絵画空間への接触「第一手」にて、ものが入る構造を設定し、描画上の概念「線」を、存在を刻みつけるナイフとして使用し表現した。しかし、距離や空気という要素が介入すると、存在は塗りつぶされて消えてしまう。これは、線の現出が面になることが原因である。面には空間的な空洞が付き纏う。また自画像はその空洞をより明らかにした。モデルを描いたとしてもそれは主観を描いているに過ぎず、決して他者を描けない。

３章　客体の取り込み　キャンバスをリンゴにする

絵画で唯一主観を逃れている客観的存在–キャンバスもしくは平面をモチーフにする試みを行う。平面というモチーフの行き着く先は、表現の終焉であり、ここには主題とネガの表現の空洞化が隠されていた。そこで、キャンバスの目の上にのみ絵具を載せ、一様な凹凸面を拡げ、虚の透明性を用いて半分キャンバスの空間を創る事でそれを乗り越えようとした。一定の成果の見られたこの表現だが、この表現は絶妙なバランスで保たれており、過剰に入れ込むことで不気味の谷の発生に繋がってしまった。

４章　平面的なるまなざし　キャンバスを消す方法

４章は解決の糸口についての考察である。「小さくなる」は、点を用い、それだけで在無を反転させる方法について考察する。ここから支持体と描画材の分割の必要性、図と地の「地」にこそ他者表現の可能性が秘められていることが分かる。「絵具」では、塑性のある絵具に対して、抉らないナイフとして「心太」の表現方法を使用することについてである。この表現は「横」というもう一つの面を生成した。「変形」は変形キャンバスを用いることである。絵画と物質を、食い込む状態に整理する為には、両者の「境」に注目する必要がある。「色と光」では、色を支持体から分離させる為に行った「色距離」の実験について考察する。

５章　存在の点滅　リンゴの在り処　１対１で向き合うこと

結論として、他者・作者・絵画・ものと自然科学の客観性、の面から表現内容の認識を更新し、筆者の解答「存在の点滅」表現を確立する。「点滅の表現―ネガ的な形成」では、方法論として心太式「存在の点滅」がどの様に他者を示すか考察し、点滅・虚の平面・横の面からその方法を浮き彫りにする。「主観と客観、だけではなく」では、主観と客観から抜け出した先にあるものが、つながり自体の表現であることを論述する。

６章　博士展解説

「存在の点滅」の最新の状態を博士展作品を取り上げ紹介する。

終章

表現の中に「他者」を存在させる表現の研究は、不可能への挑戦である。しかしこの方法論によって提案される多面的つながりは、２０２３年現在が抱える社会の問題に求められる方法だと主張する。そして「他者」を知る生き方の提案として可能性を持っていることを、リンゴ＝他者とは何か・芸術について・つながりについて、の三項にて考察し、結びとする。